

例年、「理学部ニュース」の3月号では、「定年退職の方々を送る」という特集が組まれている。定年退職される方に執筆頂いた記事と、ゆかりのある方からの送る言葉が掲載されている。まことに個人的な話ではあるが、最近ふと思い立って、それらの記事を過去にさかのぼって目を通してみた。というのは、今年(2016年)の2月に米国の重力波望遠鏡LIGOが、重力波信号の初観測に成功したと発表したことがきっかけである。私の恩師である坪野公夫先生は、研究者人生のほぼ全てを重力波研究に捧げ、その初観測という夢が叶わぬまま、2013年に定年退職された。その際に、何を書かれていたのか気になったのである。そこには、「私の経験と勤が正しければ、10年以内に

久保理学部長に昭和44年度日本学士院恩賜賞	2
昭和43年3月末にご退官される先生方	
吉田耕作教授(数学教室)	3
藤田良雄教授(天文学教室)	4
森野米三教授(化学教室)	4
前川文夫教授(植物学教室)	5
理学部の制度改革についてのアンケート	6
お知らせ(東京大学再建基金、地球物理学教室藤代技官退職)	6
理学部全員交渉第2回会合流水	7
編集後記	8

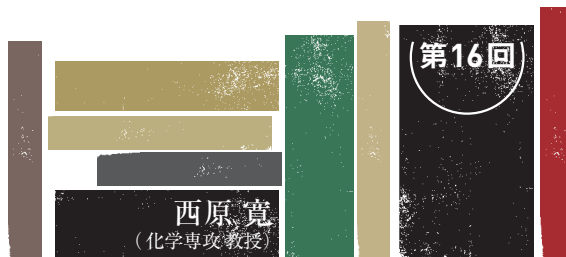
1969年「理学部弘報」1巻5号の目次。当時は編集委員会がお話を伺ってまとめる、という形式で記事にされていたようである。

## 先人の言葉

は確実に重力波は受かっているであろう。そのときには、これまで誰も見たことの無かった中性子星やブラックホールがその姿を現わすはずである。」(2013年3月号)と記されており、まさにその通りになったのだと感慨を覚えた。他の先生方の記事でも、経験に基づく知恵や将来への見識、そして研究への情熱や感謝、新たな人生への決意といったお人柄が凝縮されていることを感じた。それらはまさに「温故知新」の宝庫だと感じた次第である。

# 理学の本棚

## レイナーキャナム 無機化学



東大で無機化学の講義を担当して20年になる。百種を超える元素の化学に関する無機化学を教えるには、詳しい情報が万遍なく詰め込まれている教科書が必要になる。私の学生時代からコットン・ウィルキンソンやシュライバーなど、幾多の名著が教科書として広く使用されてきたが、総じて原著は分厚く、和訳本は上下2巻になる。必要な情報を網羅しつつコンパクトな教科書を探していたところ、「レイナーキャナム 無機化学」に出会い、翻訳をした。和訳本は紙面一杯に情報を詰め込んで、手軽に持ち運べる一冊本にした。

本書には他の無機化学の教科書にない面白さがある。第9章の「周期性」が独特であり、そこを中心に本全体にわたって、元素間の類似性と差異が丁寧に解説されている。そして各元素の特長が、様々な物質の構造や特性にいかに関与するかを反映させ、各物質が我々にどのように役立つのかを理解させてくれる。さらに適所に配置されたコラムは、頭をリフレッシュさせるとともに、身近な話題で化学の魅力を教えてくれる。全体を一読すると「科学の知識欲」を満足させる爽快感がある。

理学部化学科では、2015年度から3年生の講義をすべて英語にした。したがって、教科書も原著を指定しているが、日本語で読みたい人には本和訳書も薦めている。脚注に重要な用語の英語を示し、「訳注」で欧米と日本の違いからくる分かりにくいところを解説しているのが、特に工夫したところである。



G. Rayner-Canham, T. Overton 著  
(西原寛, 高木繁, 森山広思訳)  
「レイナーキャナム 無機化学」  
東京化学同人(2009年3月出版)  
ISBN 978-4-807-90684-0